

管内大規模酪農場における牛伝染性リンパ腫清浄化に向けた取り組み

東部家畜保健衛生所 辻 遼子 ほか

1 はじめに

牛伝染性リンパ腫（E B L）は、牛伝染性リンパ腫ウイルス（B L V）の感染により引き起こされる腫瘍性疾患である。管内で搾乳牛約350頭を飼養する大規模酪農場において、E B L対策を継続的に実施し、抗体陽性率が、平成25年度の62.8%から20.6%に大きく低下したので概要を報告する。

2 経緯

本農場では、平成23年度からパステライザー導入等の対策を開始し、平成25年度の県外での預託育成から帰牧した初妊牛（帰牧牛）の陽性率は、パステライザー導入前の牛群が14.0%、導入後の牛群は4.7%であった。これらの成果により、農場主の意欲は向上し、清浄化に向けた対策を順次拡充して継続的に実施している。

3 清浄化対策

(1) 垂直感染対策

5日齢までの子牛全頭に、パステライザーで加温処理した初乳を給与。

(2) 水平感染対策

平成27年度には、新設した成牛舎B（妊娠確認後～乾乳前牛群）で、陽性牛及び高産次牛と陰性牛を鉄柵により区分した分離飼育を開始した（図1）。

(3) 陽性率低減対策

牛群更新については、陽性牛を優先して淘汰して感染源の減少を図っている。

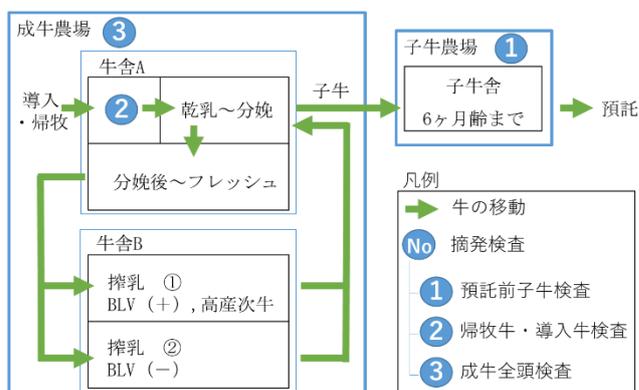
(4) 吸血昆虫対策

牛舎全面に防虫ネットを設置するとともに、害虫駆除剤を定期的に散布し、併せて粘着テープも設置している。

(5) 陽性牛の摘発検査（遺伝子検査（PCR検査）及び抗体検査（ELISA検査））

平成26年度より、①6ヶ月齢未満の預託育成予定子牛（預託前子牛）のPCR検査及び②帰牧牛及び導入牛のELISA検査を毎月実施するとともに、③成牛全頭のELISA検査を隔年の牛定期検査時に実施している（表1）。

図1. カウフロー模式図及び検査実施状況



4 結果

①預託前子牛検査（PCR検査）

平成26年度～29年度の4年間に407頭実施し、うち10頭が陽性であった。その後平成30年度～31年度には193頭実施し、全頭が陰性となった（表1）。

②帰牧牛・導入牛検査（ELISA検査）

平成26年度～31年度の6年間に34頭の抗体陽性牛を摘発した（表1）。

表1. 預託前子牛検査及び帰牧牛・導入牛検査結果

		H26	H27	H28	H29	H30	H31	合計
預託前子牛 検査	検査頭数	63	108	124	112	89	104	600
	陽性頭数	2	2	3	3	0	0	10
帰牧牛・導入牛 検査	検査頭数	24	82	128	120	116	84	554
	陽性頭数	0	9	16	3	5	1	34

③成牛全頭検査（ELISA検査）

陽性率は、平成25年度の62.8%から、順次減少し、31年度には20.6%（360頭中74頭）とさらに減少した（表2）。

表2. 成牛検査結果

	H25	H27	H29	H31
検査頭数	218	303	346	360
陽性頭数	137	124	132	74
陽性率（%）	62.8	40.9	38.2	20.6

5 まとめ

これまで総合的な対策を継続的に実施したことにより、6年間で農場の抗体陽性率が約3分の1以下に大きく低下した。これらの結果により、本疾病対策への農場主の意識は高く維持されており、将来的には、「BLVフリー」を目標としている。今後は対策を継続しつつ、陽性牛の頭数減少に合わせたカウフローの見直しや飼養区画の再考等の成牛舎における更なる水平感染対策の徹底について、農場主とともに検討し、目標達成を支援していきたい。